
英雄少女の狂詩曲

白群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄少女の狂詩曲

【Zコード】

N8795Q

【作者名】

白群

【あらすじ】

題名も何も書かれていない怪しい本から異世界トリップしてしまった女子高生、天宮蓮。ここは王道に救世主として喚ばれたのかと思いきや、世界を滅ぼす力を持つ『双黒の聖霊姫』と、忌み嫌われた魔王みたいな存在のようだった。で、でも私、別に滅ぼす気なんてさらさらない！何故喚ばれたのか分からぬけど、夢じやないと分かつた今、何とかして帰る方法を探さないと…。世界を滅ぼす存在だと思われていた少女が、世界を救つた英雄と讃え謳われるまでの、道程を演した狂詩曲。^{ラブソング} 3／22あらすじ変更しました。不定

期更新でのんびり執筆してこれます。

?

>b r <

顔を出した途端、嫌がらせのようにギラギラ照りつける太陽。雲一つない見事なスカイブルーの空。今日の最高気温は38・7度。そう今は、受験生を除いた学生たちのパラダイス、夏休みの中盤である。

「よっしゃー！宿題終わったー！」

天宮蓮は達成感をたたえた笑顔を浮かべ、大きく伸びをした。夏休み初日から真面目にやっていた宿題が、遂に一言日記以外全てやり終えたのである。

鼻歌混じりで勉強机の上に散らばる宿題を片付け、学生鞄にさつさと入れる。そして立ち上がり、机に掛けた大きな紙袋を手に持つて、ベッドにひっくり返した。

どさつと大量の本がベッドの半分を占領した。>b r < 文庫本からA4型本まで、ほとんどがファンタジーものの作品である。

「宿題も終わったし、後5日は部活ないし、気兼ねなく読めるぞー！」

蓮は幼い頃から本が大好きだった。特に好きなのが、魔法や剣などが出てくる、現実では到底あり得ないファンタジーもの。恥ずかしいので誰にも言つたことはないが、物語の騎士に憧れて、中学の部活は剣道部に入つたぐらいだ。

勉強も忙しい上、剣道部は練習量も多く厳しくて大変だが、とても楽しくて高校生になつた今も続けている。しかし、大好きな本を読む時間は極端に減つてしまつたが。

だからこそ、なんとかして読む時間を作つてているのだ。>b r <

蓮はわくわくどきどきと胸を高鳴らせながら、何を読もつかと物色していると、見慣れない本に目を見張った。

「何これ…？こんな本買ったっけ？」

A4型本サイズの題名がない、使い古されたような薄汚れた黒い革表紙の本。

夏休み前に買いに行つた、友達に教えてもらつた古本屋は欲しかつた本がたくさんあつた。尚且つ高校生の少ないお小遣いでも余裕で足りる安い値段で売られていて、それはもう夢心地だったのは覚えていい。

だがこんな、まるで魔法使いの魔術書みたいな怪しい本、買っただろうか。

「もしかして紛れこんでたのかな？」→b→b→ 古本屋のレジの、『お釣りが違います』と何度も言つているのに、何度も『何て言つたかの～』と聞いてきた、ようやくしたおじいさんをふつと思い出す。しかし、もしお金を払つていなかつたら悪いので、返しに行こうとその本を手にとつた。

突如カツと本から眩しい光が溢れ、驚愕して本を放した。

「えー？ 何？ ちょっと？！」

まるで何台もの車のヘッドライトを当てられているように、手で目を防いでも、どんどん眩しくなっていく。そして、蓮は耐えられず目を閉じた。

。 . 。 + . . + .

「おい、ジーさん！なんなんだよこれは！」
 そ
 れらを見たアレンは怒りと驚きの入り混じつた声を上げ、常に無表
 情のティルでさえ呆然とした表情になつてゐる。

「おおのアーネクシヨンジヤ」

今日の朝いきなり師匠に、裏庭のいつもは鍵で頑丈に閉じられた、立地面積の広い石造りの建物に呼びつけられた。

奥まで薄暗くて覗けないが、見える範囲の中はすごかつた。天井まである棚に所狭しと置かれたというか詰め込まれた、良く分からぬガラクタやら物凄い量の本。重さに耐えきれなかつたのか、棚が崩壊しぐちゃぐちゃになつてゐる所もある。

「一人には」こを片付けて欲しいんじゃ」^{ハハハハハハ} そん
な師匠の衝撃発言にティルが目を見開き、隣のアレンのこめかみの
青筋がブチつとキレる音がした。

「何で俺たちがそんなことしなくちゃならねえんだ！ ていうか有り得ねえだろ！ この量は？！」

「わしの人生かけて集めたものだから。
かなり貴重なものから希少なものまであるぞ」

貴重ならちゃんと自分で整理しろよ! すげー埃まみれじやねえか

「二二さんとこ最近腰が痛くて咳も出で…もうわし一人では出来んの
じや…か弱い年寄りなんだからのう…」

「誰がか弱い年寄りだ！昨日街に行つて女遊びしてたじゃねえか！この色ボケじじい！」> b r < > b r < 「ほつほつほ。まだまだわしも、お前のその貪相なモンよりは女を満足させられるぞ？」

「んだとこのくセじじい！」

始まつたら最低一時間は続く、親子喧嘩ならぬ祖父孫喧嘩に溜め息を付き、ティルは先に建物の中に入った。

灯り取りの窓のおかげでかなり薄暗いが、物の一つ一つは確認出来る。等身大の謎の石像が多数、絵のはまつていない美しい彫刻の額縁、そして本以外の形容し難い使い道の分からぬ物など…。以外に面白くてふらふらと見物していると、ふと足が止まった。

何故だか分からぬ。高く無造作に積まれた書物のちょうど真ん中辺りの一冊が目に止まつたのだ。> b r < まるで導かれるように、まるで操られているかのように、何の躊躇いもなくその本を抜き取つた。

じわじわじわじわと大きな音を立てて、積まれていた書物が床に落ち、むわっと濃い霧のように埃が舞い上がる。

ティルはそんなことお構いなしに、ただ穴があきそうなほどそれを見つめていた。

題名のない、薄汚れた黒い革表紙の何の変哲もないこの書物。何故こんなに惹かれるのか本当に分からぬ。しかし頭では分かつても、まるで手だけ別のものになつてしまつたかのように、表紙にそつと手をかけ、開いた。

途端に待つていましたと言わんばかりに溢れ出る、薄暗い空間を埋め尽くす神々しい光。> b r < 思わずティルは書物を手放し、目を腕で覆いながら後退る。

“……やつと繋がつた…私たちの姫が…”

その時、心底嬉しそうな囁き声が耳に響き、ハツとして田を開けた。

光は消えていて、代わりに田の前に座りこんでいたのは、随分奇妙な服装をした、ぽかんと口の開いた間抜け面の、この世界では決して有り得ない黒田黒髪の双黒の少女だった。

>br<

?

兎を追つて穴に落ちてとか、衣装箪笥の中からとか、そういうえばトイレで流されてなんて話もあつた。

これでも夢見る乙女な私、異世界にトリップしてみたいなーと、ほんのちょっと夢には思つていた。

でもね、夢といつても、アイドルになりたいとかパイロットになりたいとか、夢は夢でもそういう実現出来る夢とは有り得ないほど次元が違う。

うん、夢に思いつつもちゃんとそこらへんは割り切つて考えていましたよ? 私ちゃんとした高校生だからね? 小学生じやないよ? だからきっと、目の前のこの光景は、たまたま本を読みながら昼寝をしていて、そして夢をみているに違ひない。うん、絶対そうだ。怪しい本が光つて異世界だなんて、そんなアホな話があるかつてんだ。ははは…

桜のようだか花びらが水色の花が散るぽかぽかと暖かな日差しの中、喫茶店のような白く丸いテーブルを挟んだ、痛いほど注がれる4つの視線から逃げるように冷や汗を流し俯きながら、蓮はただひたすらに思考逃避していた。

「…お前、名前なんつーの?」

躊躇いがちに話かけられ、心の中で起きろ起きろと叱咤していた蓮は、突然虚を突かれて豆鉄砲を食らった鳩のように飛び上がった。そんな怯えたように見えた彼女の反応に、金髪の青年も同様に驚いて慌てた。

「わ、悪いー驚かすつもりじゃなかつたんだ」

ぱつ悪そうに頭をガシガシ搔いて、安心させるように快活な笑顔を浮かべた。

「オレはアレグレッタ＝シュタイン。アレンって呼んでくれ。で、こっちのだんまりで仏頂面がラメンティル＝ターナー。こいつも名前長いからティルで良いよ。」

ティルと呼ばれた隣に座る青年も、読めない無表情だが別に異論は無いと頷いた。

飲み込めない状況に、不安で高鳴っていた胸の鼓動も、次第に落ち着きを取り戻していた。自己紹介もしてくれたし、きっと悪い人ではなさそうだ。

「私は天宮蓮と言います」

「アマミヤレン…全部名前か？」

「いえ、蓮だけです」

「へー、レンか。良い名前だな」

初対面の人には名前を誉められるなんて初めてで、戸惑いながら蓮はありがとうござりますと頭を下げた。

すると、コトノと目の前のテーブルに良い香りのティー・カップが置かれた。ふつと視線を上げると、白い鬚毛を蓄えた優しい蒼い目の、かなりのじ年配のおじいさんが立っていた。

「これでも飲んで落ち着くんじゃ。美味しいクッキーもあるぞ」

ほつほつほと明朗に笑つて、嫌そうな顔のアレンの隣に座つた。

「げ、ハーブティーかよ…オレ好きじゃねえんだけど」

「我が儘言つでない。馬鹿孫が」

「チッ…嫌いなの知つて淹れやがったな…ああ、レン。このじじいはオレの祖父のマエスタ。趣味は女遊びの色ボケじじいだ」

「お前も似てるもんじゃろ。まあ、もつともお前は女逃げられじやうづが」

「いつオレが女に逃げられたんだよ?…」

いきなり目の前で始まつてしまつた口喧嘩に、蓮がどうしようとオロオロしていると、テイルが気にするなど静かに声をかけた。

「いつものことだから、心配しないでくれ」

無表情でティーカップ片手にクッキーを頬張る青年を、蓮もハーブティーを両手で包み込むようにして飲みながら、チラシと盗み見て先ほどの記憶を巻き返してみた。

明るい己の部屋から一転し、埃っぽく薄暗い場所。ふと見上げれば、右頬に大きな傷があるかなり背の高い無表情の男性。そりやびっくりしない訳がない。本から光が出てびっくり。そして更にびっくりその上正直すごく怖かった。でも陽の下に出てみると、まだ結構怖いけど、それなりに気も使ってくれるし、以外に優しい人なのかもしれない。寝癖だらけのちょっとと錆びた十円玉みたいな色の短髪に、神秘的な暗い深海の濃藍の瞳。宝石みたいできれいだなつてとても思う。うん、モデルさんみたいにかつこいいし。

盗み見どころかまじまじと見つめる蓮に気付く、テイルはひょりと訝しげな表情で彼女を見た。

「…なんだ?」

「くつ?…い、いやあの…二人共仲良しだなって思つて…」

あなたについて考えてましたなんて恥ずかしくて言える訳がない。ちょっと赤くなつて慌てて隣の一人についての話題を上げると、喧々囂々と口喧嘩していたアレンがはあつ?…と、信じられないといつた表情でバツと蓮に視線を移した。

「これのど」が仲良しなんだよ?…」

「よくケンカするほど仲が良いとか言いますから。仲良しなのかなつて」

蓮は自分も妹とよくケンカするけど、結構仲は良いことを思い出しながら、睡然とするアレンに言った。
それを聞いて、テイルは目を見開き、マエスターは吹き出した。

「流石、双黒の聖靈姫は言うことが違うの。わしらのことを仲良しだなんて言ったの、お前さんが初めてじゃ」

何故三人が驚き笑うのか蓮は不思議だったが、それより、聞き慣れない単語の方が気になった。

「あの、双黒の聖靈姫つて…何ですか?」

「何つて…お前さんのことだが?」

「う？私のこと？」

「ど、どういたしまですか？」

「ん？聖霊様から使命なんか告げられていなかつたのか？」

せいれいさま？から使命？

初耳過ぎる単語に蓮がぽかんとしていると、三人が顔を合わせ、マヒスタがうーむと唸つた。

「おかしいのう…双黒の聖霊姫は聖霊様の使命を受け、そして世を正しく導くと言われてるんじやが…」

「双黒なだけであつて、聖霊姫じやねんじやねーか？」

「それはない。レンからは微弱じやが聖霊の力を感じる。これは人として有り得ないことじや」

そのマヒスタの言葉にテイルも頷いてくる。せいれいの力？

「あの、よく分からないんですけど…なんかすみません…」

そのお告げとやらを聞いていないことに、何だかよく分からないが少し罪悪感が出て、申し訳ない気持ちになつてうなだれた。

「お、おこ、別にレンが悪い訳じやねーよ。だから謝るなつて」

「やうじやな。ただの言ひ伝えじや。すまないのレン。ぐだりん」とを言って

「い、いえ！大丈夫です」

こんな見知らぬ人間にも親切にしてくれるなんて、なんて優しい人たちなんだろうと蓮は感銘を受けた。うーん、やっぱり夢だからなのだろうか？でも本当に気になる。何だろ聖靈姫って。

「すみません、その聖靈姫について詳しく聞いても良いですか？本当に私なのかも分からぬので…くしゅん！」

暖かつた日差しがいつの間にか鉛色の雲に阻まれ、肌寒い風が薄い生地の長袖シャツと短パンの蓮を襲つた。マエスターがふつと空を見上げ、眉をひそめる。

「まだ昼前なのに少し風が冷たくなってきたのう。残りは昼飯でも食べながら家の中では話すとしようか」

他の三人も一様に頷いた。

?

案内された家の中は、調度品から家具から色彩まで妙に外国情緒たっぷりの内装だった。蓮自身は日本から一度も出たことはないが、外国の映画やテレビドラマで見たような覚えがある。しかし、欧米っぽいとも言えるし、アジアっぽいとも言えるし、何っぽいと聞かれても取り敢えず日本っぽくはないとしか答えられない。

汚そうな靴下を脱いで素足のまま、あつたかい何かの動物のふわふわの毛革ソファーに腰掛けながら、蓮は応接間のような部屋をキヨロキヨロと見渡していた。

しばらく経つて、部屋の奥へと消えた三人のうち、お盆を持つたアレンだけ戻ってきた。

「あれ? 一人はどこへ行つたんですか?」

「あーうん、ちょっと外にな。すぐに帰つてくれるぞ」

どうしてまた外に? とは気になつたが、あまり深入りして聞くのも良くないと思い立つた蓮の隣りに腰を下ろし、目の前のテーブルにお盆を乗せた。それには、良い感じに溶けたチーズをのせた丸い形のスライスされたパンと、恐らく牛乳らしい飲み物が入つたマグカップが一組あつた。

ハイジのパンみたいと蓮が感動していると、香ばしい匂いに刺激されたらしくお腹がぐーっと鳴った。途端恥ずかしくなつて、真つ赤になると、アレンが堪えきれなくなつたように吹き出した。

「お前面白いやつだなー。青くなつたり赤くなつたり笑つたり。見ててホントに飽きないぜ」

「…なんかスリマヤン…」

「何謝つてんだよ。やつぱり面白くなーレンは。ほらこれ食えよ。腹減つてんだろ? オレはいらねえからさ」

笑われてるのが恥ずかしくてアレンと田を合わせず、俯いたままパンを受け取つて頬張つた。シンプルなのにすこく美味しくて、蓮は田を輝かせてひたすらもぐもぐ食べていた。

半分ぐらい食べた後、「ふと視線を感じて顔を上げると、何だか変に不思議な表情をしたアレンと田があつた。

「ああ、食べてる最中悪いな。気にしないでくれ」

気にしないでと言われても気になるものは気になる。だが、取り敢えずパンを食べてからにしようと思立ち、そして食べ終わつた。

「いやつがつきました。すぐ美味しかつたです」

「そーか? 悪かつたな。」んなのしかなくて

「いえ、私こんなに美味しいチーズとパン初めて食べました! 本当に何から何までありがとうござります」

感謝の笑顔と律儀に頭を下げる蓮。アレンは何か思案するよつこしばりく蓮を見つめ、そしてため息をついた。

「オレ本当に信じらんねえぜ…お前があの聖靈姫つてこと」

その困ったよつな顔つきで、蓮は首を傾げた。アレンは立ち上がり、

目の前の壁に掛けてある読めないが文字のよつな刺繡が施されたタペストリーの横に立つた。

「『光と闇の均衡が傾き世界が崩落するとき、闇に愛された美しい容姿を持ち、光に祝福された純粹な心と力を持つた双黒の聖霊姫が正しく導くであろう。』まあ、これがこの領地に伝わる双黒の聖霊姫のことだ」

「世界を正しく導く…なんか勇者みたいでかつこいいかも。しかし、それが全く他人事ではないことだとハッとした。

「えつと…それが私?」

「一応じーさんの御墨付きだしな。オレには聖霊の力とかは分かんねーけど…」

「うーんと何か言いにくそうに言葉を濁し、タペストリーを見つめながら難しそうな表情で頬をポリポリと搔いた。

「でも実はさ、他の領地つていうか街つていうか、まあオレの故郷ではかなり遠くて…」

「壮大すぎるその内容に呆然とした蓮に視線を移し、意を決したよう口を開いた。

「『闇を纏う双黒の聖霊姫が現るとき、その卓越した恐ろしき力で光を侵食し世を滅びに導く』ってな」

「世を滅びに導く…それもう魔王じゃん、なんかすごいなー。しかしまともや、それが他人事ではないことだと愕然とした。

「…それも私…何ですか？」

「え？、らしいよな」

勇者でもあり魔王もある。なんか斬新だけどあまりに極端すぎ。せめてどっちかにしてほしい。…でも…選べるなりやつぱり勇者の方が良いかも…。蓮は恐る恐る質問してみた。

「一体…どっちが正しいんですか？」

「正しこそ一つ…か…どっちを信じてるかって感じだな」

「信じるへ。」

「例えその答えが間違いだとしても正解だと思つてたら正解だろ？善からみれば悪は悪、悪から見れば善は悪とかな。聖靈姫が世界を救うのが本当に正解だったとしても、世界を滅ぼすが正解だと信じてる奴から見れば間違いのよくなもんだ」

予想以上にレベルの高い返答が返ってきた。えつと…つまり、うーんと…。

「聖靈姫は世界を救うのに、滅ぼすって思つている人が多いってことですか？」

「いや、それが本当に救う存在なのかも分からねえんだよな。この2つの聖靈姫の伝説だって眉唾もんだし。というより、今この国が危機的状況にあるのかさえ分かんねえし」

あーー。や、らに頭がこんがらがつてきたーー。蓮は必死に頭をフル回転させて考えていると、知らぬ間に再びアレンが隣りに腰を下ろしていた。

「まあでもさ、実はオレも双黒の聖霊姫は悪で正解つて信じてた方で。最初あの倉庫でお前を見た時、あ、この世も終わりかつて思つてたんだ。テイルは何考えてつか分かんねえけど、喜んでたじーさん見て信じられなかつたぜ、本当」

アレンはおもむろに蓮の肩にかかる黒髪を一房手にとり、じつと彼女の顔を見つめた。

「でもよくよく見てみると、髪と田の色が違つだけで別に他の女とほとんど変わんねえなつて思つて。国を滅ぼすなんて出来る訳ねえよな」

見事に晴れ渡つた空のよつに透き通つた蒼い瞳に見つめられ、何だか変に落ち着かない心地に陥つた。うーん、でもホントきれいに整つた顔だなあ。テイルさんも格好良かつたけど、また違う格好良さなんだよね。もつと大人な感じがするつて言うか。艶があるつて言うのかな? いつたい何歳ぐらいなんだろう? そんなこと考えていたら、知らずに口からポロリとこぼれでた。

「アレンをさつていいくつなんですか?」

「…は…?」

アレンの動きがビシッと止まつた。

「いや…今聞くとか? 普通?」

「…す、すいません！ただ気になつただけで…言いたくないなら別
こいいんで！」

わたわたと慌てて謝る蓮を見て、アレンは呆れたような溜め息を
ついて彼女から少し離れた。

「お前つてさ、よく天然とか言われんだが」

「あ、はい。どうして分かったんですか？」

「…どうして…」

つこでこむうひとつ溜め息をつこて、まあ、いいかと呟いてちゅ
つと悪戯っぽく微笑みながら、蓮の頭に軽くポンと手を置いた。

「歳教えてやつてもいいけど、一つ条件な。そのさん付けと敬語止
めてくれ。好きじゃねえんだ」

「えーーーでもアレンさんは年上なんですよ、年上は敬づのが…」

「ほひ、さん付けしない

「う…ア、アレン…」

さんを付けないよつて向とか踏みとどまつた。

「で、でも敬語は少し待つてから…まだ出来つてしまつかりなのが、
そんな簡単には出来ません！」

部活のルールや家訓の一つがまず年上には敬語だったため、そうそつ長年のくせは直せない。必死に手を合わせお願いをする蓮。アレンは数回瞬きし、ふっと笑顔になつてそのまま蓮の頭をわしゃわしゃと乱した。

「ド天然にクソ真面目かよ。こりゃあ難攻不落だな

「な、難攻不落？何がですか？」

答へずに、ただとても面白そうに笑うアレンに、頭髪をぐしゃぐしゃにされながら首を傾げる蓮だつた。

「ああ、そりそり、オレは24。レンは？」

「私は17です」

「17か、テイルの一つ下だな」

やつと解放してもらい、蓮の髪を直していたその手がぴたりと止まつた。

「テ、テイルさんつて18なんですか？！」

アレンよりはなんとなく年下のような気がしていたが、少なくとも二十歳はいっていると思つていた。まさか十代、驚きだ。

「あいつ無駄に背えたけえし、いつも無表情だから老けて見えるよな。歳の差結構あんのにオレより年上に見られる時あるし。だけどあー見えて、甘いもん好きだつたり趣味が料理だつたりすんだぜ？」

「い、意外です…」

甘じものが好きというのは共感できるが、趣味が料理というのはすごい。自宅の電子レンジ爆発させかけたり、調理実習でクラスで唯一10段階評価の1を付けられた経験のある蓮は、物凄く尊敬に値すると思つた。

「だらー？あんな見た田なのにさ。確かに料理は面倒いけど、エプロン付けたティルの姿はおもしろ」「何の話してるんだ？」

ハツと一人が振り返ると、いつもの無表情よりちょっと眉根が寄つたティルが立つていた。一人が座るソファーの後ろには扉は無い。一体どこから入ってきたのだろう？

「お、お前いきなり真後ろに飛んでくんないマジびっくりしたじやねえか！」

「俺の話をしていたからか？」

「ど、どこのから聞いてたんだ？まさかエプロンの話を…」

そのエプロンに心あたりがあつたのか、ティルの眉根がさらに寄り不機嫌そうな顔になる。う、口が滑つたとアレンが慌てて口を開じた。だが、気まずい空氣を知つてか知らずか、蓮は田をきりきり輝かせ口を開いた。

「ティルさんって料理出来るんですねー！」

ティルは面食らつて蓮を見た。

「すうじいです！私料理作れないから尊敬しかや－います！」

変な沈黙が落ちた後、ティルはアレンとふつと目を合わせ、そして蓮に視線を戻した。

「お前…変なやつだな」

ただ正直に言つただけなのに、どこが変なんだろう？ そりいえば、アレンには面白いこと連発されていたし。本当によく分からない。

「私のどこが変で面白いんですか？」

思いつきり首を傾げる蓮を見て、ティルは微妙な表情に、アレンは可笑しそうに笑つた。

「天然で真面目だろ？ 面白れーよな」

「…面白い」というか変わつてゐる。双黒の聖靈姫だからなのか？

「魔術師でもねえオレに聞くなよ。だけじほんと参るよなあ…。折角落とそうと思つたら…」

アレンの最後の聞こえるか聞こえないかぐらいに小さい呟きに、ふつとティルが表情をえて視線を移した。

「やつぱりそのつもりで…」

その侮蔑にも近い冷やかな視線に、アレンは慌てて弁論に走つた。

「あ、いやその…最初からそういうつもりじゃ…なんていうか、その気にさせられたつーかなつたといふか…」

「…師匠が先に帰れと言つた意味が分かつた」

「やつぱりあのじじいのへれ知恵か！別にその氣にはなつただけで手は出してねえよ…」

「…本当かレン。大丈夫だつたか？」

突然話を振られ、返事にちょっと間があいた。

「あ、はい、パンを！」馳走になつて聖靈姫について教えてもらいました

「それだけか？嘘付かなくて良い」

「おい！…どんだけオレ信用ねえんだよ…」

「こつもの行いが悪いから」

「だからって、やけらへんの良識ぐらこはあるわ…」

激して更に言い募る「としたアレン！」何かを思い出したティルがああと声を上げて制した。

「師匠が呼んでいた」

「つて、今言つタイミングかよ…。ジーさんが？」

「風化の街の入り口で待っていると言っていた。数日かかるかもしれないから準備して来いと」

「数日… つたく面倒だけどじょうがねーか」

かつたるそこに立ち上がり、アレンは不思議そこに見つめる蓮に気付いて笑顔を向けた。

「すぐ帰つてくっから。待つててなレン」

再び蓮の頭をぐしゃぐしゃにかき混ぜて、扉の奥へと消えてしまつた。

ちよつと呆けながら髪を適当に直していると、ふとソファーの横に立つ無表情に戻つたティルと視線が合つた。

「…部屋に案内する

そうぶつきらぼうに言い、扉の奥へと消えかかったティルを慌てて蓮は追いかけた。

フツと気付くと、あれからもう3日も経っているのに気が付いた。

その後、ティルさんに畳室ぐらいの懐かしい広さの部屋に案内してもらつて、簡素なワンピースのような服と布のズボンを借りて…それから…昼過ぎだというのに何だか疲れて、お口様の香りのふわふわのベッドで寝てしまつたらしく、気が付いたら朝日が眩しく輝いていた。その時、いつの間にか毛布がかかっていて、きっとティルさんだと思ってお礼を言つたら、顔を背けられてしまった。…何か悪いことしちゃつたかな…？

それから1日は、二階建ての家が丸々一軒入りそうな物置の掃除を手伝つた。ティルさんにはしなくて良いって言われたけど、他にやることもないし、『ご飯を頂いている身としては何か役に立ったかったから。

そして更に次の日、暖かな木漏れ日の中、地べたに置かれた埃まみれの呆れるほどの山積みの本を、一生懸命一冊ずつ乾拭きしている最中だった。

さらりとやわらかな風が頬を撫で、手を止めて顔を上げた。

桜に良く似た、しかし決定的に違う水色の花びらの花が咲き乱れる、樹齢何百年も経つていそうな巨木が視界いっぱいに広がる。

水色の桜なんて、有り得ない。本から異世界トリップなんて、有り得るはずがない。

そんなおどぎ話のような、まさにファンタジーな話なんて、決して。

だからすぐに夢を見ているんだと思っていた。アレンもティルさんもマエスタさんも、この桜もあのパンも、全部不思議な夢。醒めるまで待つていたのに、一向に醒めることがない。

試しに頬を抓つてみた。痛いだけ。前と同じように目を閉じて起きる起きると感じてみた。瞼を上げても変わらない。…そんな…

まさか…。

「…夢…じゃないの…？」

蓮の掠れた小さな咳きに、まるでその通りと頷いたように、風に煽られ花々がざわめいた。

夢ではない。それはつまり、現実だということ。目なんか醒めない。だつてもう醒めているから。

その時、真後ろからドサツと、重いものを少々乱暴に下ろしたような音に気付き、振り返った。

「本はこれで最後だ」

高く積まれた埃まみれ本に片手を置き、さらに埃まみれのティルが額の汗を腕で拭っていた。拭いたのを抜いても百冊以上ありそうだ。まだまだ終わりそうにない。

だが、何だかやる気にはなれなかつた。いまが夢なのか現実なのか分からぬ。

ティルは複雑な表情で俯く蓮を黙つて見つめ、しばらく突つ立つていた後、そのまま本を挟んでとなりに座つた。そして側に落ちていた乾いた布を取り、黙々と本の埃を拭い始めた。

蓮はティルの頬から首にかけて長い傷が残る横顔を見つめ、おもむろに視線を目の前に移した。

「これ、桜ですか？」

手を止め、ティルも顔を上げた。

「よく知ってるな」

「…？珍しい木なんですか？」

「Iの一帯にしか咲かない花だからな。知ってる方がまれだ」

「そりなんですか…こんなにきれいなの！」

少し残念に思つ。水色の桜。青空よつ薄いから、まるで一夜の夢のように儚げで、普通の薄桃色の桜より幻想的。

「…レンの世界にはあったのか？」

ハツと蓮は目を見開きテイルを見た。テイルの表情は相変わらずよく分からぬ。だが、その言い方はまるで…。

「…Iは…異世界なんですか…？」

「レンから見たら、そうなるだろうな」

一度寝て起きても変わらない。何しても戻らない。信じたくはなかつたが、もう心のどこかではこれが現実だと分かつていたようだ。そこまでびっくりしなかつたことに驚いた。

「どうして…分かつたんですか？」

「黒田黒髪はIの国…いや、Iの世界には絶対生まれない

「でも、まさか異世界からなんて」

「着てた服も見たことは無かつたし、双黒の聖靈姫は異世界より喚ばれると云つ逸話もある」

「そり…だつたんですか…」

しばらく沈黙し、そしてまた蓮が口を開いた。

「実は私、最初は夢だと思ってたんですよ」

「夢?」

ティルは不思議そうな顔をする。

「本が光つたと思ったら、こんなところにいたんですね。普通は有り得ないですから」

「…有り得なくはない」

「えつ?」

次は蓮が不思議そうな顔になつた。

「それは媒介移動術という魔術だ。魔術書を媒介に飛んできたんだわ」

まじゅつ…魔術?!

蓮はぎょつとした。

「魔術を知らないのか?」

「し、知つてゐるは知つてますが…この世界には魔術師がいるんですねか?！」

「師匠…アレンの祖父がそうだ」

「マエスターさんが？！」

優しくてちょっとお茶目なマエスターが頭に浮かぶ。そんな感じには見えなかつたが、まさか魔術師なんて…。

「あれ？ 師匠ってことは… テイルさんも魔術師なんですか？」

いや、まだ見習いだ

今度はティルがぎょつとする番だった。蓮が瞳をきらきらさせ、詰め寄ってきたからだ。

「お願いします！ちょっとで良いから魔術を見せて下さーー！」

「そんな珍しいものではなかった？」

「私の世界では珍しいと『NN』が夢か本にしか出てこないんですね！」

田と鼻の先にまで詰め寄られ、ティルは拭き途中の本を放し、慌てて身を引く羽田になつた。

わ、わかつたからちょつと離れてくれ

「はい！」

再び指定位置に座り、わくわくどきどきと表情を輝かせる蓮に少し戸惑いながら、ティルは目を閉じて呪文を詠唱した。

途端、目の前にふわりと火の玉が浮かんだ。手のひらサイズの綺麗な青い狐火。目と鼻の先なのに全然熱くない。

「これは炎術の一つだ」

触つても熱くないと呟つので、恐る恐る触れてみる。ほんとだ、火なのに全然熱くない。うちに飼つてている猫のようだ、ほんのり温かくて何だかホツとする。

「あ、この前アレンといった時のも……」

「ああ、あれは瞬間移動術だ。テレポーションとも言つが」

ファンタジー小説歴十数年。まさか魔術師に会えるなんてと、感動で胸がいっぱいだつた。もしかして……。

「騎士とかもいたりしますか？」

「元だが、アレンがそうだ」

「ア、アレンが?!」

優しかつたがノリは軽るいし誠実そう……にはちょっと悪いがあんまり見えなかつた。だが、体つきはティルよりもつしりしていたし、剣道部の男子に良く似ていたのを思い出す。マエスターといい、本当に血が繋がっているんだと感心した。よし、アレンが帰つてきたら色々話を聞いてみよう。

「本当に嬉しい……憧れの騎士に会えたなんて……」

「騎士が憧れ？変わってるな」

「やうですね。そこには変わってるって認めてます」

「…（そこだけじゃないと思つが…）」

ティルはそう思つたが、何となく口には出せなかつた。蓮は田の前の火の玉が飼い猫に見えてきて、何となくずつと撫でている。

「小さい頃に、騎士がお姫様を悪い竜から救う絵本を読んで、ずっと憧れなんです。大切なものを命をかけてでも守り抜く、その生き様が格好良くて素敵で…惚れたんです。私もそなりたいって」

真つ直ぐ桜を見つめる漆黒の瞳。ティルは驚いて、少しだけ目を見開いて蓮を見ていた。彼自身、あまり他人とは接したことはない。だが、こんなにも強く凛として、純粹で綺麗な瞳は見たことは無かつた。

「まあ、こんな小娘が何言つてるんだって感じですけど…」

「何だかちょっと恥ずかしくなつて、えへへど」「まかし笑いを浮かべる蓮の頭の上に、ポンとティルが手をおいた。

「そんなことは無い。俺は立派だと思つ

ティル自身、知らず知らずのうちに微笑んでいた。蓮はちょっとびっくりして、何故か少し胸の奥が弾んだ。何だろう？今の…。だけどそんな疑問より、嬉しさの方が上回つた。

「ありがとうございます。そう言つてくれたの、ティルさんが初め

てです。それに……ちょっと安心しました。私も、ティルさんに良く思われないのかなって思つてたんで

「何?」

ティルは怪訝そうな表情になつた。

「一昨日お礼を言つても素つ氣なかつたし、あんまり話かけない方が良いのかなって思つて」

「それは……そのだな……」

手を戻し、そっぽを向いてティルは言い淀む。顔はよく見えないが、少し耳が赤いような…手のひらの狐火もほんのり赤みを帯び始めている。

「別に嫌いだとかそういう理由じゃない。ただ…慣れていないとか…驚いたというか…」

歯切れの悪い答えに蓮は首を傾げるばかり。でも、嫌われてないなら良かつた。安堵と嬉しさで蓮はにこにこと笑つていると、突然ティルが立ち上がった。

「…拭いた本を持って行く…すぐ戻つてくる」

手早く本を積み上げ、顔を見せずに蓮が声をかける間もなく、家の中に消えてしまった。一体全体どうしちゃつたんだろ?

残された蓮はしばし彼の消えた扉を見つめ、そして再び桜を見上げて一つ小さいため息を付いた。

「…帰れるかな…私…」

…ううん、きっと方法があるはず。私が何故喚ばれたのか分から
ないけど、何とかして帰る方法を見つければ。

でもまあ、恩を返さなくちゃと、本の埃拭きを再開した。

?

優しい風が頬を撫でる。さらさらさらり。

木々がその風を受け、枝を揺らし心地の良い音楽を奏でる。ざわざわざわり。

気付けば、私は一人森の中にいた。人間が何人いても一回り出来ないような太い幹の、天を仰ぐように高い歴史を感じる古い巨木。私の背丈より低い、まだまだ途方の無い年数のかかるだらう瑞々しい若木。大小、高低様々の樹木たち。

ああ、ここはとてもほっとする。まるで大きなものに優しく慈しまれながら、包まれているような安心感がある。

…

一瞬、何か聞こえたような気がした。振り向いても、辺りを見渡しても誰もいない。

ー 姉…私たちの愛しの姉…

やつぱり聞こえる。苦しそうで悲しそうで、でも慈愛に満ちた優しい声。

あなたはだれ？

ー 風化の街へ…私に…私たちに救いの手を…

突然ごうと風が大きく鳴り、木々は激しくざわめき、とつとに目を閉じ耳を塞いだ。

そして、何も聞こえなくなつた。

。' . . 。 + 。 ' . . 。 + 。

それを聞いたテイルは、朝食の片付けをしながら盛大に眉をひそめた。

「風化の街へ？何故だ」

皿拭く手伝いをする蓮は、夢のことを正直話すか躊躇つた。思わず目を伏せ、どうも元気の無い蓮の様子をテイルは難しい表情でしばし見つめ、思い出したように皿を再び洗い始めた。

「今、風化の街へ行くのは危険だ。妖魔が出没している

「よつま？何ですかそれ？」

「人の血肉を好物とする化け物だ」

蓮は皿を見開き手を止めた。

「まだ噂だけで見たことは無いが、微かにあの場所で穢れを感じた。妖魔がいる可能性は高い」

「…救いの手を…」

あの耳に残る、苦しく悲しい、それでも優しい、胸がつかえるようなあの声。危険と分かつたとしても、ほっとくなんて出来ない。

「…昨日、夢を見たんです。誰かが私に助けを求める夢を」

「夢…だと？」

「声だけで姿は分からなくて、それに何で私を姉とか呼ぶのか分からなくて…分からなことだらけなんですけど…でも行つてみたいんです。風化の街に」

皿を置き、正面から真っ直ぐ見上げるその真摯な目に、ティルはハツと息を飲み、そして、溜まった息を吐き出した。

「…俺もアレンや師匠の帰りが遅いのが気がかりだった。だが、蓮一人で留守番をされるのは出来ない」

「え…それじゃあ…」

「分かった。一緒に行こう」

パアツと顔を輝かせ、ありがとうござりますと深々と頭を下げた。ティルもしようがないなとは言いつつも、嫌な表情はしていなかつた。

「だがいいのか？あの魔術書、あと少しで解読出来そうだが…」

チラリと蓮は、テーブルの上に置かれた古ぼけた黒革の本に視線を移した。ティル曰く、これがこの異世界へと来ることになつてしまつた元凶らしい。確かに古本屋で買ったあの本と瓜二つだ。解読

出来れば、帰ることが出来るよつなのだ。

「きっと今帰つたら後悔します。それに、帰るんだつたらちやんとアレンとマニスターさんに挨拶してからじやないと」

ティルは目を瞬かせ、そして可笑しそうに小さく笑つた。

「…そりゃ。真面目だな蓮は」

「そりゃ、ですか？」

真面目と言われてもあんまりピンとこない。授業中はよく寝てるし、宿題も時々やつて来ないし、部屋も本だけで整理整頓されてないし…。蓮はうーんと首を傾げた。

やつぱり自覚がないのかと、洗つた手を手拭いで拭きながらティルは思つた。

「何はどうあれ、俺は準備していく。蓮は納戸から外套を持ってくれ」

「外套って、大きいマントみたいなやつですよね？」

「ああ、このあたりは街の外れであまり人はいないが、もし見つかったら大変なことになる」

確かに世界を滅ぼす双黒の聖靈姫らしい私が見つかったら、そりゃあ大変なことになるだろう。それぐらい蓮にも分かつた。

「分かりました!すぐ持つてきます!」

思わずビシッと敬礼をして、蓮は直ちに納戸へ向かつた。

?

用心したものの運良く誰にも会わず、朝から太陽が真上近くまで昇るほど歩いたその時、突然鬱蒼とした森が開けた。思わず蓮は目深に被つていた外套のフードを取つた。地平線の方まで続く荒れ地が広がつていて、元は家だと思われる廃墟や瓦礫の山々と、地面にこびりついている申し訳程度の縁が目にに入る。

「ここが風化の街だ」

何とも寂しい場所だと蓮は思った。足を踏み入れしばらく歩いても、動くものは何も無く、白い瓦礫の山が数え切れないほどいくつもいくつも点在しているだけ。

あまりにも心細くなつてしまつて蓮はティルの側に近寄つた。顔を見上げると、彼は眉根を寄せて難しい顔をしていたが、しばらくして口を開いた。

「…遙か昔、ここは聖靈神がおわす聖地だつたらし。様々な植物や動物たちと人間たちが共存し、それはそれは豊かで美しい森だつたそうだ。だが、人口が増えるにつれ森は伐採され石は切り出され、動物は殺されあつという間に森は無くなつてしまつた。それに激怒した神が一日で全ての人間を消してしまつた。それで風に化した街、即ち風化の街と言われていると伝承が残つている」

「そんなことが…だから…こんな…」

寂しくて悲しい、それでいてどこまでも蒼く澄み切つた空が変わらずに優しくて、まるで、夢の中のあの声のよう。

その時、ティルが何の前触れもなく立ち止まつた。

蓮がどうしたんですかと聞く前に、突然斜め前の数メートル先の瓦礫の山に手のひらを向け早口で何かを唱えた。その同時にバチッと静電気の数倍大きくしたような音と、彼の手が一瞬青白く瞬いた。その瞬間青い電光が走り瓦礫の山にぶち当たつた途端、爆ぜてその奥から何とも言えないおぞましい叫びが上がつた。

「噂は本当だつたか」

次々と瓦礫の影からゆうりと何かが姿を現した。蓮は思わず小さな悲鳴を上げる。

それはそれはおぞましい姿だつた。頭は犬、体は一本足で立つ真っ白なゴリラ、そして蛇のような尻尾を生やし色々な動物を縫い合わせたような、目が黒く瞳孔がぎらぎらと真つ赤に輝いている。くそつとティルが厳しい表情で悪態を付いた。

「中級クラスが六体…まさかこんなに…」

「これが妖魔…」

「いい加伦。俺が合図したらあの瓦礫の影に隠れるんだ」

ティルは妖魔にまだ塞がれていない瓦礫の方向を指差した。

「でもティルさんは…」

「心配するな、俺なら大丈夫だ。いくぞ…行け…！」

蓮はティルの言葉を信じて、脱兎の如く走り抜け瓦礫の影に滑り込んだ。瞬間、再びティルの手から先ほどより強い青白い閃光が迸

り、妖魔たちの悲鳴が轟いた。

あまりの恐ろしい声にしゃがんで身を竦めていると、突然ぬつと大きい影が入り込み息を飲んだ。

「怪我は無いな？走るぞ」

正体はティールであった。ほっと息を付く間もなく、ぐいっと手を引かれ走り出した。

「すまない…蓮を連れてくるべきじゃなかつた…」

苦々しい顔のティールのその言葉に、何度も首をふつた。

「私が我が儘を言つたんです。ティールさんは悪くないです」

「…蓮ならそう言つだらうと思つた。しかし状況は良くない。早く師匠たちを見つけなければ…」

背筋がゾッとする、背後から妖魔たちの怒り狂つた怒号が響いてきた。

「で、でも一人の居場所なんて分かるんですか？」

「師匠の魔力を感じる。おそらく」

ティールが言いかけたその時、そう遠くない前方から白い光が瞬き、微かに雷が落ちるような音がした。ティールがはつと顔を輝かせる。

「間違いない、師匠の雷術だ！行こう蓮！」

「はいティルさん！！」

大きく蓮は頷き、二人は瓦礫の山の中を走り続けた。

?

廃墟と瓦礫の山々が開け、壊れた噴水らしきものが中央に建つ、円状に広がる石畳の広場のようなところに蓮とティルは出た。

そこで見た光景は、先ほどとは比べ物にもならないたくさんの妖魔たちに襲われ応戦しているマエスタとアレンの姿だった。

「師匠！アレン！－

ティルは雷術を放ちながら一人の元へと、蓮もその後を追いながら駆け寄る。

「ティル！おお、レンも一緒に。すまないのレン、折角来たのに案内出来なくて」

「冗談言つてる場合かジジイ！」

かまいたちのような鋭い風で妖魔をぶつ飛ばしているマエスタが朗らかに笑つているのを見て、妖魔を片つ端から斬り倒しているアレンが怒鳴つた。

「くそつ…きりがねえ！一体何なんだよこれは…－

「おかしいの？…冬の前はなんともなかつたところの元…」

思案じつつもマエスタは手を休めない。

「もしかしたら…レンが呼ばれたのも偶然ではないのかもしない

「えつ？」

「わしらの知らないところで世界の均衡が揺らいでいるのかもしか
んの」

「世界の均衡を危ふまえに、これまあじつにかしなきやいけねーだ
ろー。」

「師匠、突破口を作つて逃げるのは…」

「いや、ここの数では突破口作つたとこひぐに捕まるのが落ちじ
や」

「だつたうじつたら良いくんだよ?...」

ジリジリと背後の噴水へと追いやられていく。

更に増幅していく妖魔。四人の脳裏に絶望とこつ文字がちりつき
始めたその時、一陣の風が吹きわたった。

“……姫……私の名を呼んで……”

頭の中に響く、優しくて暖かいあの夢の中の声。

(誰?あなたは誰なの?)

“貴女が呼んでくれれば……私は再びこの地に降つ立つことができる

……”

(呼ぶ……?あなたの名前は……?)

“私たちの姫…私の名は…”

その時、隙をつかれアレンが剣を弾かれて、鋭く光る爪が降り下ろされるのが目には入った。

ティルとマエスターがアレンの名を叫び、彼が死を覚悟した瞬間。

「…コピテル…」

蓮が小さく歌うように紡いだその名前。
途端全ての妖魔が断末魔の悲鳴を上げ、苦しみもがきだし、そして蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。
何事かと状況が読めずに目を見張る四人。

「な、なにが起きたんだ…？」

地べたに座り込むアレンが呆けたように呟いた。
するとまるで台風のような凄まじい風が吹き荒れた。身構えるも、不思議なことに四人には全く影響がなく、髪の毛一本なびかない。呆気にとられているあいだに、周りの景色が見えなくなつた。
そして、台風が弾け消え現れたのは、あの夢の中と同じ美しい森だった。

“…ありがとう姫…私は縁風の聖靈神コピテル…姫のおかげで眠りの守護からとかれた…”

「聖靈神って…えつ？…マエスターさんがいってたあの……！」

「やうじや…この地をお守りくださっている神じや…生きている間にこのお声を聞けるとは…なんて素晴らしい…！」

マエスターは感極まり涙目になつてゐる。ティルも少なからず感動してゐるようで、アレンはただただ驚きっぱなしだった。

春の日差しのように穏やかで優しい声が聞こえるものの姿は見えない。この森 자체が聖靈神のようだ。

“姫…貴女を喚んだのは今、再びこの世界に危機がおどずれているから…闇が光を侵食し、何者かが均衡を崩そうとしている”

「なるほどのう…妖魔が異様に出没してるのはそのせいか」

マエスターが難しい顔で納得したように頷いた。

“この世界を救うために私たちの姫…貴女の声で私たち聖靈神を守護の眠りから目覚めさせて…されば、私たちは再びこの世界に均衡をもたらすことができる”

蓮は何も答えなかつた。否、答えられなかつた。世界を救つてなど、あまりに凄いことを言われて、頭が追いついていなかつた。

「そ、んな…私が世界を救うなん…」

さつきはそんなバカなど笑つてすましていたが、実は本当らしかつた。全く笑えない。

“いいえ、貴女にしか救えない…眠りについている聖靈神は姫の声しか届かないから”

「…どうして私が聖靈姫なんですか？そんな特別な力とかもないし…もしかしたら私じゃないかもしない…」

すると蓮の頭を優しく撫でるかのよつて、ふわりと小さい風が髪を揺らした。

“私たちは別の世界ながら、貴女が生をつけた時からずっと見守っていた。特に私は守護には付きながらも眠ってはいなかつたから、ずっと貴女のことを…貴女が聖靈姫であるのはこの世の偶然であり必然…見間違うはずがない…そんな私たちの姫を危険に晒すようなことはしたくなかった…でもこの世界もとても大切…だから貴女に…レンにこの世界を救つてほしい”

大きくて穏やかで優しいものに包まれているような、安心した気持ちになれる。神様の切実な願い。聞きたいこと、不思議なこと、たくさんあつたが。

「…私がこの世界を救えるかなんて分かりません…でも私にしか出来ないことがあるのなら…」

この世界に来て一週間ほど。とても綺麗で、優しくて、今さら見捨てるなんて出来そうになかった。ぐつと拳を握りしめ、前を向いた。

「私、やります」

“…ありがとうございます姫…”

ふわりと神様が笑つたような気がした。そして再び竜巻のような激しい風が巻き起こり、森が見えなくなつたと途端に消え去つて、何事も無かつたような廃墟と瓦礫の山々の風景に戻つた。蓮は気が抜けてぺたんと石畳に座り込んだ。

「…大丈夫か？」

蓮が見上ると、少々心配そうなティルが手を差しのべていた。

「はい…」

手を伸ばして、彼の大きくて温かい手のひらに包まれて立ち上がった。

「…本当にいいのか？」

「えつ？」

「この世界を救うなど、レンには関係のないことだ。もしかしたら無事ではいられないかもしない」

ティルの言つ通りだ。それでも、蓮は決めたのだ。

「いいえ、私は関係無くてもティルさんたちには関係のあることです。それに私、この綺麗な世界をひとつ見てみたいんです。だから、できる限りのことを、私はやります」

迷いはなかつた。

「それならティル、お前もレンと共にいくのじゃ

マエスターの言葉にて、ティルはまつと顔を上げた。

「お前はもう見習いことこのレベルではない。十分レンの助けになる

だろう。後、良かつたらこの馬鹿孫も連れていってくれ

「ひむせージジイ。言われなくたつてオレは最初からそのつもりだ

アレンも蓮の隣に立った。

「レン、お前はオレが護つてやる。これでも元騎士だしな」

にかつと快活なアレンの笑顔を見て、蓮は心の奥が温かくなつた。

「…ですが、師匠一人ではまた妖魔が現れたりでもしたら…」

「もうこの一帯は聖靈神がお目覚めになられたから大丈夫じゃね。心配するな。それにお前はレンと共に行きたいのじゃね？」

ティルは図星を突かれたように一瞬言葉を詰まらせ、そして、大きく頷いた。

「ここから出たことのないお前にも良じ経験となるじやね」

そして、マエスターは恭しく蓮に頭を垂れた。

「レン、いや双黒の聖靈姫。どうかこの世界を救つてくされ

「ひつして後に英雄と讃え歌われる少女の、世界に光と闇の均衡をもたらすための旅路が、開幕のベルを響かせ始まつたのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8795q/>

英雄少女の狂詩曲

2011年10月8日18時08分発行